科　　目　　名
歴史学と課題Ⅱ **History Ⅱ**

2年　後期　2単位　選択

西　村　正　顯

概　　要

高等学校において日本史が必修教科から外されて久しい。グローバル化が進んだ現在、社会人が仕事をする中で外国人と交わる機会が非常に多くなっている。外国人が自国の歴史を誇りあるものとして滔々と語るのを見るとき、日本の若者が祖国の歴史を語れなかったり曲解していたりしていたりする現状は実に悲しいことである。

本講では、日本の近世・近代・現代の歴史を、新たな史実を検証しながら学んでみたい。

目　　標

1　近世・近代・現代の歴史の発展を理解する。
2　外国との関わりの中で日本はどのような選択をしたか、当時の時代背景と共に理解する。

授業計画

テーマ	内　　容
第1回　戦国時代から織豊政権へ	戦国大名の富国強兵策とはどのようなものであったか、また織田信長が群雄割拠の中から頭角を現し全国統一への先鞭をつけ、豊臣秀吉が統一を成し遂げた過程とその政策を考える。
第2回　幕藩体制の成立	江戸幕府が約260年間も続いたのは、その緻密な統治システムが機能したことによる。江戸幕府の国内統治政策及び対外政策について考える。
第3回　将軍家綱から家治までの幕政	江戸幕府が安定し泰平の時代を迎えるが、農業に過度に依存する統治システムは幕府財政・藩財政を次第に逼迫させていく。その過程と将軍吉宗の改革の意義について考察する。
第4回　江戸時代の社会と文化	産業の発達や商業の活発化に加えて、鎖国により外国文化が国内に入りにくくなった江戸時代には、日本独自の文化が一般庶民を支持者として大いに発展した。
第5回　大御所時代から幕末の混乱へ	江戸幕府が長く続いたために国内に退廃的なムードが蔓延しているさ中にロシアやイギリス等の外国勢力が接近し、幕末の激動の時代へと突入する経緯を考える。
第6回　開国と幕末の動乱	ペリーの来航によって開国を余儀なくされた幕府、朝廷を中心に攘夷を主張する人々、薩摩・長州は西洋列強との戦争を経験して攘夷が不可能であることを悟り倒幕へと舵を切る。それぞれの立場の人々の努力と苦悩について考える。
第7回　明治維新と立憲国家の成立	新政府は、欧米列強が植民地を拡大していることを脅威に感じ、一刻も早く列強に対抗できるような近代国家を作るために近代的な制度の整備に尽力し様々な改革を断行する。一方で急激な改革は混乱も生じた。
第8回　日清・日露戦争と資本主義の発展	日清・日露戦争の背景を当時の日本人の国家観も含めて詳細に検証する。またこの両戦争が日本の産業の発展とどうつながって行ったのかについても考える。
第9回　近代文化の発達	明治政府は強大な欧米列強に対抗するために「富国強兵」「殖産興業」「文明開化」といったスローガンをかかげて西洋文明の移植による急速な近代化をおしすすめた。その具体的政策と効果について考える。
第10回　第Ⅰ次世界大戦と日本	ヨーロッパで勃発した第1次世界大戦は世界をどう変え、日本にどのような変化をもたらしたかを考える。
第11回　大正デモクラシー	大正時代は、日本の社会に様々な変化が顕著に表れた時代であった。そのような変化が現れた時代背景と具体的な社会運動について考える。
第12回　ワシントン体制と幣原外交	第1次世界大戦の反省から国際連盟が作られたが、アメリカは国内事情から参加しなかった。しかし、大統領が代わるとアメリカは現実的経済外交に転換し、国際協調のためにワシントン会議を提唱した。日本もこれに同調し、軍部の反対を抑えながら協調外交を推し進めた。
第13回　軍部の台頭と第2次世界大戦	戦後恐慌・震災恐慌・金融恐慌・世界恐慌・昭和恐慌・農業恐慌と第1次世界大戦後の日本は経済的に非常に厳しい時代が続いた。このような状況打開の突破口を大陸に求めた軍部は日中戦争の泥沼に引きずり込まれ第2次世界大戦で壊滅的な打撃を受けることになった。
第14回　戦後の日本	連合軍の占領下で行われた種々の改革、GHQ によって作られた日本国憲法、朝鮮戦争と日本の独立、日米安全保障条約の締結など、今日の日本に引き継がれ再検討が叫ばれているものは多い。当時の時代背景を検証しながらそれらの問題点を考える。
第15回　定期考査	後期授業の理解と学習到達度を評価する。

授業方法

テキスト及び各時限に配布する資料をもとに講義を行う。

学習到達度の評価

1）毎時間その授業についてレポートを書かせ、授業の理解度を把握する。
2）授業においては極力質問を発し、学生に歴史上起こった事象について「何故？」と考えさせ、学生の思考態度を評価する。

評価方法

毎時間書かせたレポートと定期試験の成績で評価する。
配点はレポート50点、定期試験50点とする。

教　　材

テキスト「日本史のライブラリー」（とうほう）、配付資料ほか

履修上の注意

1）歴史的事象について「何故？」という気持ちで、自ら授業に積極的に参加し考える。
2）各時間の内容をしっかり押さえる。そのためのレポートである。